

緑のホリデイ

北国の遅い春は冬のモノクロームの世界に芽吹きの赤褐色の霞がベールのごとくかかり、

次いで淡い萌葱色が山々の木々にまぶされ、やがて新緑へと変身していく。本州の最北端まで北上したサクラ前線が津軽海峡でひとときの足踏みをしており、ウメにサクラが追いついて爆発的に咲く春の戦列を整えていくようである。桜の散った地方では「皮むけ」、まぶしい新緑の姿で風薫る五月を迎える。上高地の山開きウエストン祭から始まるゴルデン・ウイークも二十九日が『みどりの日』五月一日の『マイデー』と続き、二日が新緑薫る『十八夜』、三日四日の休日をはさんで五日が『端午の節句』、ついで最終日の六日の『立夏』で終わる。晚春から初夏への緑の橋渡しの季節となる。

春のみずみずしい感覚と躍動をみせる緑色は、地球上で植物とともに最初に出現した原始の色である。この色の種をもとに黄色や赤の暖かい色が育ち、青や紫の冷たい色へと

広がった。虹の色の両端に赤と紫がありその中間が緑であることからもわかるように、色の中心、色の種である緑はモノクロームの冬から多く色彩があふれる初夏への橋渡しの役に最もふさわしい。

一日のメーデーも、もとはと言えばローマの花の女神フローラたたえる祭として十六世紀のイギリスで始まつた行事であり、緑の五月を迎えるにふさわしい花摘みの一日となる。一連の緑にちなんだこの旬を迎えて、そろそろ自然を友としての『緑のホリデイ』へと発想を変えてはどうだろうか。昼は太古からの色の種である緑を森林浴で十分に味わい満喫して、夜は満天の星を眺めながら緑の惑星、天王星に果てしない夢をたくして悠久の宇宙を味わうのも一興ではなかろうか。

（気象庁・村松 照男）